令和３年度

―　テーマ・水について考える　―

水の週間記念作文集

第43回「全日本中学生水の作文コンクール」三重県推薦分

目次

（掲載順は、各賞低学年から、学校名・氏名とも五十音順）

第43回全日本中学生水の作文コンクール　入選

第18回琵琶湖・淀川流域水の作文コンクール　流域賞

受け継いでいくために　高田中学校　一年　冨永麻央　……1

第43回全日本中学生水の作文コンクール　佳作

飲水思源　高田中学校　一年　大北紗羽　……3

「生活の基礎作り」　皇學館中学校　二年　眞田京愁　……5

校外学習を経て　高田中学校　二年　後藤和葉　……7

踏み出す勇気　四日市メリノール学院中学校　三年　永福歩暖　……9

第43回「全日本中学生水の作文コンクール」について　……11

入選・流域賞

受け継いでいくために

高田中学校　一年　冨永麻央

まず、「水」という言葉から思い浮かぶものについて考えをめぐらせてみた。

水といえば―。自分に問いかけてみる。まず、真っ先に思い浮かんだのは、水道の蛇口から勢いよく流れ出る水。蛇口をひねれば、とめどもなく清浄な水がほとばしる。並々と注いだお茶も、たっぷりのスープももちろん、流水でさらしたり、多量の水で茹でることもいとわない。また、湯船に温かい湯を満たしたり、きれいになるまで、いくらでも掛け流して洗うこともできる。普段は、その恵みに感謝の気持ちすら考えることもない。それが当たり前だと思っていた。

しかし、小学生の時、ある医師の物語を知った事を思い出した。二〇一九年に凶弾に倒れた、中村哲さんである。中村さんは、アフガニスタンで、不可能だと言われた約二十五キロの用水路を砂漠の大地に開通させ、不毛の土地を緑のじゅうたんに変えた、奇跡の人だ。一面、砂と石だらけだった硬い砂漠が途方も無い努力により、緑あふれる、豊かな、麗しい草原へと変したのだ。私は、事後のあまりの違いに本当に同じ土地なのか、と目を見開き、胸が熱くなった。死んだような土地が、生き返り、むしろ、まだまだいけるとばかりにみなぎるような生命力にあふれかえっている。水の力は偉大だ。

中村さんの言葉にこんなものがある。

「絶対に必要なものは多くはない。恐らく、変わらずに輝き続けるのは、命への愛惜と自然に対する謙虚さである。その思いを留める限り、恐れるものは何もないと考えている。」中村さんの「なんとしてでも、やり通す」という強い志が、茶色い乾いた砂漠を、緑と人々の活気あふれる豊潤な大地に変貌させたのだ。水は数

少ない絶対に必要なものの一つなのだ。そして、この用水路は中村さんの想い、人生そのものなのだ。彼だけでなく、これほど、多くの人々の人生を拓く可能性と展望に満ちたものが、水の他にあるのだろうか。水は、人間にとってはもちろん、動物や植物も、人間の興す産業や工業にも、必要不可欠である。つまり、水は生命にとって、なくてはならない根源であり、持続に必須な何にも代え難いものだ。

しかし、先進国を中心に、人口増加に伴う水問題も増えてきた。海への、汚染水の排出や漁かく用ネット、マイクロプラスチックによる、水質汚濁だ。ウミガメや海鳥が、ゴミを誤飲したり、ネットにからまり、もだえる映像は、私の脳裏に焼きついている。思い出す度、胸を押さえられるようだ。今や水が循環していることは、幼い子供でさえ知るところだ。無かったことにするかのごとく、汚物や汚水を流してしまえば、汚れた川や海になる。そして、汚い大気を吸着した汚い雨が降りそそぎ、大地をも汚染する。全てが我身に返ってくるのだ。できるかぎり、心地悪い循環ではなく、心地良い循環が望ましいのはいうまでもない。あれほど渇望した水だったはずが、いったん継続的に手に入るとなれば、随分ぞんざいに扱われる。無かったことにした水は、また後世に間違いなく返ってくるというのにだ。

私は、このゴールデンウィーク中、特に節水を心がけた。歯みがきをする時はコップに水をため、手洗い時もこまめに水をとめた。不思議と、明るい気分になった。

これからも、節水や排水の行先を意識し続けたいと思う。ふんだんに使用する水を浄化させて排出するのは、大変な労力を要するはずだ。より節水できる場面と過度に汚染された排水を抑えるよう、考えてみたい。

私達は水に恵まれている。だからこそ、それに甘えず、水について考え続けることが肝要だ。世界の水問題にも目を向け、些細なことでも協力したい。かけがえのない水と地球を大切にして、受け継いでいくために。

佳作

飲水思源

高田中学校　一年　大北紗羽

中国の故事成句には、「飲水思源」という言葉がある。この言葉は「水を飲む者は、その源に思いを致せ」という意味だ。私は、この言葉を知った時、二〇十九年十二月四日にアフガニスタンで凶弾によって命を落とした、中村哲医師を思い出した。中村さんは、「百の診療所より一本の用水路を！」と、戦乱と大旱魃の中、千五百本の井戸を掘って、十三キロの用水路を拓いた。アフガニスタンは、地球温暖化の影響で、高山の雪が夏まで残らず春の大洪水、夏の大旱魃がひどくなっていた。砂漠化が進行し、飢餓と大量の難民が発生した。水がなければ麻薬用のケシしか作れないこと、つまり、麻薬による犯罪が増えることを心配した中村さんは、「医療より水」が大事であると考え、白衣を脱ぎ用水路を建設した。

水問題は、飢餓だけでなく治安にも関わる。水がなければ、植物が育たず食料不足になったり、経済面でも発達できなくなったりして、人々の生活に悪影響をもたらす。国土交通省は、世界で起こっている水資源問題の原因として、「人口の増加」、「気候変動」、「水紛争」を挙げている。特に、地球温暖化による気候変動は洪水や旱魃を招くため、水の利用可能量に大きな影響を及ぼす。

私達が住む日本では、水問題を実感することは、まだない。なぜなら、飲み水はすぐに手に入るし、蛇口をひねるときれいな水がいくらでも出てくるからだ。私の生活では、トイレ、お風呂、洗たく、植物の水やり、そうじ、食事、歯みがきなどで使用する。日本人一人あたり、一日平均使用量は約三百リットルで、世界平均の約二倍である。使い過ぎである。私は昨年、一日断水生活を経験した。一人二リットルだけの水を

使い生活したところ、トイレもお風呂も不潔でとても不便だった。この経験から、私は、水を思う様に使えない人々の生活が大変なことを実感した。それと同時に、自分たちがとても恵まれていることを感じた。

今なお、地球温暖化は進んでいる。それは人類にとって危機的な状況だ。水が豊富な今はあたり前ではない。「飲水思源」、井戸を掘った人がいるから私達は水が飲める。水がなくならないように、今から私達ができる対策を考えなければならない。

まずは、水を節約すること。具体的には、歯みがきや、お風呂の時に水を出したままにしない。お風呂で使った水を洗たくに活用する。水を勢いよく出して無駄に使わない。次に、地球温暖化を防ぐために二酸化炭素の排出量を減らす。具体的には、電気をつけたままにしない。自動車をなるべく使わない。使っていないコンセントを抜く。このような対策で水を大切にしていきたいなと思った。

「飲水思源」、私はこの言葉と、中村さんを忘れることなく、未来のために水を大切にしていきたい。

佳作

「生活の基礎作り」

皇學館中学校　二年　眞田京愁

私の住む地域では、夏になると家の前を流れている用水路の周りに、沢山の蛍を見ることが出来ます。田んぼの青い稲の間をかくれんぼするみたいに飛んだり、水路の側の葉っぱにとまっていたりして簡単に見つけられ、とても沢山いました。私の目の前まで飛んで来て、ピカピカ光らせている姿は、話しかけてくれているみたいで、うれしくて心臓がドキドキしてとても興奮したのを覚えています。

「あと何年位、こんなに沢山の蛍が見られるかな。」とお父さんが言っていたけれど、こんなに沢山いるのに何でそんな事を言うんだろうと、聞き流していました。

家の中に戻ると、一匹の蛍がどこからか紛れ込んでいました。家の中では飼えないから外へ逃がしてあげなよと言われたので、何で飼えないのか知りたくなり、図鑑で蛍の事を調べてみました。すると蛍の幼虫は、きれいな川の水でしか住めないこと、さらに穏やかな水の流れ、砂やエサとなるカワニナが必要だということがわかりました。

私たちの安全な水と蛍にとっての安全な水は違うのかもと思いました。そして私たちが住みやすくするための行動は、蛍にとっては住みにくくなるのではないかと考えました。用水路がコンクリートなどの人工水路になり、私たちは安全になるけれど、蛍の幼虫にとっては、住むのに必要な砂や「穏やか」な流れが無くなってしまいます。そして毒性の強い農薬がまかれたり、除草剤が使われたりして、人間にとっての便利さが蛍にとっては暮らすのに不都合になってきていると思います。私自身が蛇口をひねり、水を出して使うことが普通の日常の暮らしになっていますが、その

使った水が下水道を通り川へ流れ、汚してしまっていることになっていたのです。お茶を飲むのに使ったコップを洗う。何気なくしている事ですが、きれいな水を使って、蛍にとっての住みやすいきれいな水を汚していたのです。

毎年、蛍を見るために用水路まで行くのですが、年々蛍の数は減ってきています。しばらく探してやっと数えられる位しかいません。ゼロになってしまう前に、水を汚すことをやめなければいけないと思います。夜、トイレに入った時、窓に蛍が数匹とまっていると、とても明るくて幸せな気持ちになります。この幸せを自分の手で壊してしまわないように出来ることから始めなければいけないと強く思います。

少しの汚れならば流れによって川は自分の力できれいにしていくことができます。魚も住むことができ、コケを食べ他の生物もその魚を食べに来たりして生息することができます。しかし汚れが多くなると、魚が住めなくなりコケが増えすぎ、生息していた生物は住めなくなってしまいます。川は自力できれいにする事ができなくなり、どんどん汚れていき、その汚れた水を人が使うためにまた強い薬を使いさらに生物が住みにくくなる水を出してしまうことになるのです。

川の汚れの半分は、私たちの日常生活から出る生活排水であるとニュースで言っていました。自分たちの出す生活排水が原因ならば、自分たちが再利用などして自身で減らす努力をしなければいけません。

少しの汚れでも、川に住むものにはとても大きな汚れです。さらに生活排水をきれいにするために、その何倍ものきれいな水を使わなければなりません。

私たち自身が生きていくためには、なくてはならないものの一つが水です。流れのある川をこれからも守っていくことは私たちの生活を守るための基礎となることなので、大事な役割だと思います。

佳作

校外学習を経て

高田中学校　二年　後藤和葉

「砂漠に一つだけ何でも持っていけるとしたら何を持っていきたい？」

小学生だった時に何気ない会話の中で突然、友達に聞かれた質問です。私はその時、テレビと答えました。すると友達は、私だったら水かなと言いました。私は「え、一つしか持っていけないのに、わざわざ水なんか持っていく必要ある？」と思いました。なんとなくその事が頭から離れなかったため、その日の夜、私はお母さんとお父さんに同じ質問をしました。二人は即答で「水だ」と言いはりました。「なんで？水くらい、いつでも飲めるじゃん。せっかくなら砂漠なにもないし、テレビとかの方が面白いじゃん」と私が言うとお父さんに、「人間の体の中にはどれくらいの水が含まれていると思う？」と聞かれました。私は知らなかったので適当に二パーセントくらいじゃないかと答えました。お父さんは「六十パーセントくらいなんだよ。ちなみに、人間が一日に摂取しなければいけない水分の量は一・五から二リットルくらいだよ。」と言いました。この時すごく衝撃を受けたのを今でも覚えています。そして、立て続けにお母さんからこんな事も言われました。「それに、さっき水くらいと言っていたけれど、それは日本で育ったからそう思えるのであって、貧しい国などでは水もすごく貴重なものとして扱われていたりするんだよ」と。それくらい、頭ではとっくに理解していました。しかし、それは知識として知っていただけで全くの他人事のように考えていたという事に後々気づかされたのです。

それから二週間後くらいに校外学習が行われました。行き先は立命館国際平和ミュージアムでした。そこでは主に戦争についての話を聞いていたのですが、

日本が今どれだけ平和で豊かなのかという話に差しかかった時、具体的な例として水に関する表やグラフ、写真などを見せてもらいました。私はその中の一つの写真に目が釘づけになりました。そこには、泥水を飲んでいる少女とその水をバケツに入れて運んでいる少年が写っていました。この少年は何をしているのかと聞くと、生活で使うため、泥水を運んでいるそうです。自分達が学校へ通ったり友達と遊んでいる時間に他の国には学校へも行けず、濁った水を確保するためにずっと働いている子供がいたという現実が目の前につきつけられ、私はこの時、自分に対する情けなさと羞恥心に駆られ、また自分の現状にすごく感謝しなければいけないという思いが湧いてきました。

家に帰ってその日体験した事を両親に話しました。そこでお母さんに「今日の事を踏まえてこれから何が出来ると思う？」と尋ねられました。正直、その日の体験で自分の考えが変わった事に既に満足していたので、そんな事を聞かれても…そもそも現状が分かっただけで、自分一人では他国の人を助ける事なんて到底できないから何もする事なんてないと思っていました。しかし、お母さんがあえて「出来る事」を尋ねてきたという事は自分にも「出来る事」があるのではと思い、インターネットで調べてみました。すると川のゴミ拾いなどのボランティア活動がありました。その事を報告すると、「勿論それもそうだと思うけどそれよりも、もっと身近でもっと重要な事があるんじゃない？」と言われました。その言葉で閃きました。私は一番かんじんな事を忘れていました。それは、水を節約する事です。ボランティア活動に参加する事もすごく大事な事だけれど、私は第一段階としてまず、自分に出来る身近で単純な事をしっかりと実践していこうと思いました。その単純な事の積み重なりが最終的に大きな結果になるように…。

佳作

踏み出す勇気

四日市メリノール学院中学校　三年　永福歩暖

「水をきれいに！」「水の環境を守ろう！」これらのような、水の環境保全をうながす呼びかけを、みなさんは聞いた事があるでしょうか。

私は小学校六年生まで、滋賀県の琵琶湖から流れ出る、瀬田川の川沿いの町に住んでいました。そこで過ごした十二年の間、耳にタコができるほど、さっきのような呼びかけを聞きました。

さらに、学校の授業の中では、琵琶湖や瀬田川、その地域に流れる川についての勉強や、実際に川へ行ってみることもありました。正直、私はこんな勉強より図工がしたかったですし、川へ行っても水遊びばかりしていました。そんな私が、水について知りたいと思ったきっかけは、ある時、私が川の近くを歩いていると、鼻をつまみたくなる、きつい魚の腐敗臭がしてきたことです。川を覗くと、少しくぼみになっている所に、たくさんの魚の死骸と大量のゴミが浮かんでいました。空き缶やファストフード店の商品のゴミなどが捨てられていたのです。この光景を見て、すごくショックだったのを覚えています。

そのうえ、別の日の学校の授業で、死んだ水鳥の胃の中から大量のプラスチックが発見された写真を見た時は、すごく衝撃的で驚きました。これは、自分勝手な振る舞いをしている人間が、他の生き物の命をおびやかしている証拠です。

私たち人間が生きていく上で、きれいな水というのは、必要不可欠な物です。それなのに、生命の源である水を、私たちは自らの手で汚しているのです。こういった事実を知って「私も川を守りたい。」そう思いました。川や水についての授業のまとめをした時、「川を守るために私たちにできることは何だろう。」という

テーマで、班ごとに意見を出し合いました。話し合いの中で一番多かったのは、「ポイ捨てをしない」という意見でした。

確かに、私たちがまず簡単にできることはポイ捨てをしないことです。しかし、ポイ捨てをする人がいなくならない限りは、水の環境の悪化が止まることはありません。その中で、「私たちはポイ捨てをしないぞ。」と意気込むことだけが、何かを変えていくことへの第一歩になるのでしょうか。手の届く場所に落ちているゴミを拾う。ポイ捨てをしている人を見たら注意する。こんなのただの偽善だと言う人もいるかもしれません。けれども、やらない善よりやる偽善だと私は思います。

水の環境を守るために、みなさんも少しの勇気を出して、一歩を踏み出してみませんか。きっと、水の環境も、これからの日本も今よりずっと豊かになっていくと思います。

第４３回「全日本中学生水の作文コンクール」について

「水の週間」（８月１日～７日）行事の一環として実施された、第４３回「全日本中学生水の作文コンクール」の概要は次のとおりです。

１　応募要領

（１）課　　題　　「水について考える」（題名は自由）
（２）原稿枚数　　400 字詰原稿用紙４枚以内
（３）募集期間　　令和３年１月４日～令和３年５月１２日
（４）版 権 等　　・応募作品は自作未発表のものに限る。
・応募作品の返却は行わない。
・入選作品の版権は主催者に帰属する。

２　地方審査

第４３回「全日本中学生水の作文コンクール」審査基準に基づく審査により、優秀作文５編を決定しました。

審 査 員（４名）
三重県中学校国語教育研究会会員
三重県環境生活部大気・水環境課職員
三重県企業庁企業総務課職員
三重県地域連携部水資源・地域プロジェクト課職員

３　三重県の応募状況

応募学校数	応募総数	学　年　別		
		1 年生	2 年生	3 年生
４校	481 名	219 編	220 編	42 編

４　中央審査

各都道府県から推薦された優秀作文は、国土交通省におかれる中央審査会で審査され、最優秀賞１編、優秀賞９編、入選２９編、佳作（最優秀賞、優秀賞、入選を除く作文）が決定されました。

５　主催・共催

主催　水循環政策本部、国土交通省、三重県
共催　琵琶湖・淀川流域水の作文コンクール実行委員会

６　そ の 他

優秀作文５編については、「琵琶湖・淀川流域水の作文コンクール実行委員会」（構成団体：三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県）でも審査され、流域賞１編が決定されました。

三重県　地域連携部　水資源・地域プロジェクト課　　（令和３年７月）